

# 切支丹燈籠と佐伯潮谷寺

宮下 良明

(会員・佐伯市西上浦)

切支丹燈籠の発案者は、古田織部正重勝といわれ、別名織部燈籠、または南蛮燈籠とも呼ばれている。

古田織部は、千利休の高弟で、細川忠興・高山右近・蒲生氏郷等と共に切支丹大名としても有名であった。

織部は、元和元年（一六一五）六月十一日、切支丹信徒であったうえに関ヶ原の戦いに大坂方に味方し、その罪によって、家康より切腹を申し渡され、七十二歳の生涯を閉じた。長男から三男まで共に切腹、四男は自刃。家系は絶え、女系は竹田藩中川家に預けられたという。織部の考案したのは燈籠だけではなかった。その芸術的感覚は、焼物・燭台・煙管・手鏡・水差し・手鉢等に及び、それ等に十字架を焼き付けて、巧みにカムフラージュして作られていた。

「切支丹」とはキリスト教信者のことで、語源はポル

トガル語から来ているという。天文十八年（一五四九）八月十五日、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、布教を始め、元禄年間まで約百五十年間信奉されてきた天主教の通称である。

茶道の奥義を極め、芸術的意欲の旺盛な織部は、キリスト教への弾圧が激しくなればなるほど彼の頭はひらめき、十字架を巧みに擬装し、その結果、切支丹燈籠を完成させたものと思われる。

江戸幕府は徹底して潜在する切支丹信徒を取り締まり、そして迫害し、監視の目は水も漏らさぬ程苛酷を極めた。しかし、信徒達は、ひそかに幕吏の目を逃れ、このように擬装した切支丹燈籠を作り、札拝を続けていたのである。実に偉大なるこの信念こそ今日学ぶべき多くのものを含んでいると思う。

切支丹燈籠はその竿に特質がある。それは、「キリスト教」の根本的教えである三位一体、即ち父・子・聖霊の恩寵を織り込んで作られているのである。また、燈籠は幕府役人の目を逃れるため、その時代に適応し、研究して作られたものと思われ、概略次のように分けられる。

創造時代型

慶長から元和ごろまで

迷彩時代型

寛永から慶安ごろまで

擬装時代型

承応から寛文ごろまで

無刻型

天和から寛延ごろまで

なお、寛延年代以後はほとんど作成されていない。

切支丹燈籠は、日本在来の燈籠形式と異なり、イエス・

キリストを象徴して、竿を直接土中に立て、十字架を現わしている。竿の上部の丸みは、キリスト教では宇宙の中心、即ち天の父であるとの信仰から○で表現し、その中に現在まで謎とされた匠の文様が刻まれている。

また、燈籠の竿部、アーチ形の中に尊像が浮き彫りされているが、このアーチ形も教会を意味しているという。尊像の大半は足首を長く露出し、両足を左右に開いた特徴のある容姿をしている。日本の仏像の多くは両足を揃えているが、切支丹燈籠の尊像の足は、南蛮人特有の外股の姿であり、「ガウン」を着た南蛮風俗で、すらつとして背が高い。しかし、時代が下がるにつれ日本の仏像型に変わっている。

隠れ切支丹が巧みに擬装し、役人の目を逃れたものに地蔵信仰・天神信仰・子安観音・庚申信仰等がある。これ等は、キリストを仮拓（かたく）し、外見は地蔵・観

音等の信者の如く見せ掛けて幕吏の目をそらせ、ひそかに礼拝を行なっていたのである。野津町一ツ木地区の洞穴にあつた隠れ切支丹地蔵尊がそれを物語る。添付してある写真の地蔵尊の頭部にある三つの穴は、三位一体、即ち十字架を意味する。

日本における切支丹の歴史はとても学び取ることは出来ないが、さる日、元佐伯市教育委員会社会教育課長加藤氏を三余館に訪ねた。その席で佐伯藩初代毛利高政公の切支丹信仰史を聞く中に、潮谷寺の墓地に切支丹燈籠が現在も在るはずだという話が出た。早速野々下晃氏を同行して潮谷寺へ行き、住職にお願いして燈籠を拝見した。これは佐伯では珍しい一級の文化財ということであった。添付してある写真をご覧になれば分かるように、火袋・天蓋等はなく、竿の部分だけである。石質は花崗岩で、かなり風化しているが、それだけに威厳がある。これは、一体誰が何処で作り、誰がどうして運び、誰が礼拝したのだろうか。また、何時ごろの時代のものなのか？。

潮谷寺の門徒は古来より浦辺に多く、佐伯湾一帯に生



城山石垣に刻まれた記号



潮谷寺 織部灯籠

活の基盤を築き、潮谷寺の末庵は西上浦・大入島・八幡等に広く建立されている。また、潮谷寺の秘仏本尊にまつわる蛇崎の伝説等、これらを考察すると、切支丹燈籠も海岸部の信者によって潮谷寺の墓地に持ち込まれ、密かに拝んでいたものと思われるのである。

このほか高政の築いた城山の城壁にも⊕の文様が刻み込まれているが、これも一つの謎だろう。また、リーフデ号漂着実験の指夫区・海光庵のマリア観音や古江三照庵の子安地蔵・ヤソ地蔵等、佐伯市には隠れキリシタンの遺物は皆無という定説をくつがえすものが多く見られる。

江戸時代以前から多数のキリスト教信者が住んでいたものと思われる。

江戸時代を通じ切支丹燈籠の現存する数は、全国で百数十基を数えるのみという。そのうち大分県下にはわずかに六基程確認されているだけで、その一基が潮谷寺にあることになる。これは世界的な石造芸術品であり、正に一級の文化財といえるのである。

切支丹燈籠に限らず隠れキリシタン達が作り上げたものは、まだまだ他にも数多く佐伯管内に眠っているのではあるまいか。



野津町 隠れキリシタン地下礼拝堂

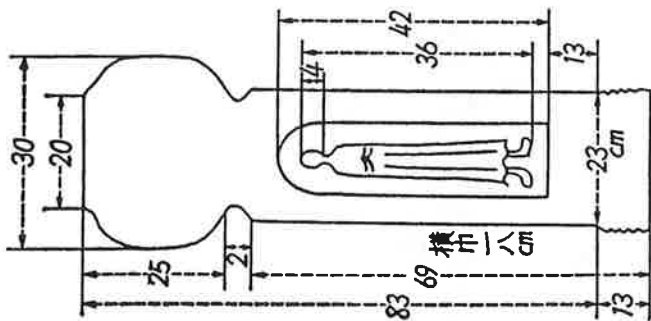
最近の風潮として、切支丹燈籠の幽玄さと、落ち着きのある風格による信仰の対象としての真髓を知らずして、近視眼的にこれを模倣し、庭園用に製作するものがあるが、これ等は最早切支丹燈籠とは言えない。  
潜キリシタンの信仰と切支丹燈籠を引用。



古江三照庵の子安観音

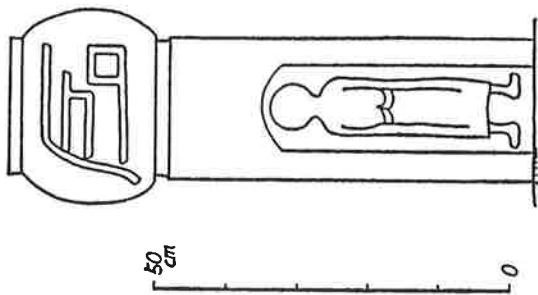


内ノ浦 海光庵の観音像

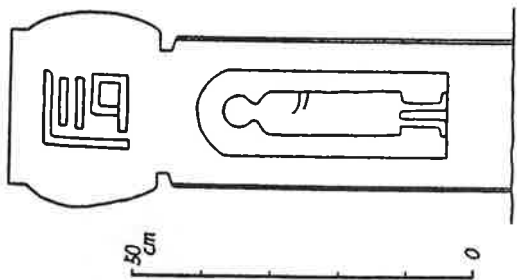


鳥取池田藩主の祈願寺院

- 丸頭身の美しい尊像
  - 最下部の荒加工部は埋められていた部分である。
  - 文様・詩偈がなくなっている。
- (鳥取市 観音院)



- 典型的な創造時代型である。
  - 幼稚な石工ののみのあとにも、何かエキゾチックな香りがある。
- (愛知県吉良町 華藏寺)



文様透彩型

尊像は足長の特長をもっている。